



わたしの名前は『あしたをはる』。実体はない。

もう少しわかりやすく言うと、わたしは電腦の中で生きている人工生命体である。

もっとわかりやすく言うなら、わたしは零と壺で構成された情報の流れである。

虚体としてわたしは猫の姿をしている。猫種はノルウェイの森の猫。特徴は毛皮が二層になっており外層は粗く、内層は密度が高いために基本的に水を通さない構造になっている。後脚が前脚より長く跳躍力に優れている。性格は知的で気高くお茶目である。ということらしい。毛色は茶のキジトラと白。体重は四キロという初期設定である。

わたしの住処は、也阿弥ホテルの本館最上階の部屋である。ここは、明治時代に京都東山の麓、円山公園の北東に建てられた京都における最初のホテルである。かつて、円山安養寺内の坊舎は料亭や貸し座敷を営み、六阿弥と称される六つの阿弥坊が存在した。その一つ、也阿弥を井上万吉なる人物が買収し、也阿弥ホテルと名付けて開業したものの明治三十二年に焼失。同三十五年に再建されるも三十九年には再び焼失し歴史の幕を閉じた。建物の外観は、日本風の瓦で和風の印象が強いが、高層建築の三階建てで窓ガラスがはめられており採光が十分に考慮された明るい構造で、さらに周囲をベランダが取り巻いており、そこには椅子が置かれているといういわゆるコロニアルスタイルとなっている。

わたしは猫らしく、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天気の良い日は椽側へ寝る事が多い。というのは嘘で、ベランダで日がな一日、日向ぼっこをして過ごすことが最も多い。ような気がする。このベランダからは電腦第七階層世界に位置するネオ京都の町並みを一望できる。也阿弥ホテルの麓には円山公園が開け、八坂神社へと続き、そこから西に向かって一直線に四条通りが伸びている。四条大橋のたもとには歌舞伎が催される南座が見え、四条通りを取り囲むように黒瓦の京町屋がうなぎの寝床よろしく蠢いている。この町並みは、幕末から明治初期の京都を模倣して構築されたものである。西北には大内裏が広がっている。大内裏の位置は、平安時代のそれに正確に一致しており、その南面中央の朱雀門からは幅員が二十八丈にも及ぶ広大な朱雀大路が南に向かって伸び、終点には羅城門がその威容を誇っている。北東には平安遷都千百年を記念して明治時代に建立された平安神宮とその大鳥居が聳え立っているが、それらを圧倒する勢いで、平安時代に白川天皇により創建された法勝寺の八角九重塔が屹立し、その周辺には尊勝寺、最勝寺、円勝寺、成勝寺、延勝寺という六勝寺が並んで建っている。このように平安時代と明治時代が混じり合って併存している景色が、この町がネオ京都といわれる所以でもある。ちょっと違うような気もするが。ネオ京都の東西南北には四神相応の地であることの証明であるようにそれぞれ大文字山（青龍）、嵐山（白虎）、巨椋池（朱雀）、船岡山（玄武）が位置し、その外方には天空に向かって火壁が聳え立っている。火壁は見た目は名前のごとく炎の柱が天空に向かって燃え立ち壁を形成しており、これが四方で連なってこのネオ京都をすっぽり囲い、外敵からこの世界を守ってくれている。

コンコンチキチキコンチキチン

コンコンチキチキコンチキチン

今日は七月十五日、祇園祭の宵々山である。四条通りには山と鉾が立ち並び、多くの虚体がそ

ぞろ歩きをしている。ヒト型もいれば戦争機械型もあり、抽象型や文字型も徘徊している。町全体に祇園囃子の鉦音が慎ましく流れ、祭りの雰囲気をもそれとなく醸し出している。そのようだ。

コンコンチキチキコンチキチン

コンコンチキチキコンチキチン

「おい、田中よ、あの計画のすすみ具合はどうなんだ」

常連客の大沢さんが主人に問いかける。

「あの計画って？」

「あの計画だよ」

「ええっと、三位一体？」

「ああ、それぞれ」と言いつつ、大沢さんは「王手」と大袈裟な声をあげる。大沢さんと将棋を指している主人はしばし沈黙の後、「参りました」と小さな声で呟く。そして、すぐに「もう一局」と有無を言わせない勢いで棋盤の駒をかき混ぜ始める。

「順調にいったる」

「順調って、三人の受容者に連絡は取れたのかよ」

「もちろん」

「ほう、で、いつ会うの？」

「明後日」

「って、早いねえ」

「って、時間をかければいいというもんでもないでしょう。気になることはなんでも早くする方が精神衛生上いいからね」

主人と大沢さんはぼそぼそと話しながら棋盤の上に駒を並べていく。

三位一体計画は最近の主人にとって第一の関心事である。と思う。具体的な内容を紹介すると、まず主人の実肉体には心臓と肝臓の小葉それに右側の腎臓がない。後二者がなくなっても生命維持には問題がないが、心臓がなくなってしまうと生きてはいけない。元の心臓を取り出した代わりに人工心臓が移植されている。そして、取り出された主人の健全な臓器は他者に移植された。他者とは、それぞれの臓器の致命的疾患に罹患した患者である。

なぜ主人はそのようなことをしたのか。それはわたしが知り得ることではない。経済的な理由からかもしれないし、人生哲学によるものからかもしれないし、単なる気まぐれからかもしれない。わからない。

主人のあちらの世界での職業は医師である。医師とはいっても、医師過剰のため就職先の病院は見つからず、また、大学の医局講座制が崩壊してしまったため就職先を求めて医局をたよりにすることもできず、一方、開業となると多大の借金を負って倒産するのが一般的という状況で、主人が切羽詰まって探し出した就職先が人工臓器開発企業の研究員であった。しかしどこも競争は厳しく、正社員としての三年契約の更新はなく、転職を余儀なくされたが、捨てる神あれば拾う神ありということなのか、非常勤嘱託という身分で己の肉体を人工臓器のモニターとして提供するという仕事にあぶりつき、なんとか生活が可能な収入を得られるようになっている。幸いなことに、人工心臓は現在もなお問題なく稼働し続けているが、人工肝臓と人工腎臓は、初期型の実験的なものであったこともあり現在も主人の実肉体のなかに在るのではあるが、機能は果たしていない。つまり無用の長物となっている。

わたしの主人は、機械に憧れているようだ。確かにそうだ。主人の理想の姿は、脳だけ自分の元のものであとの肉体はすべて機械に置き換わった機械人間である。そういう思考の持ち主ゆえに、このような実肉体の改変も躊躇いなく実行できたのかもしれない。そんな気がする。そん

な主人であるが、最近になってある論文を読んだことでこの三位一体計画を実行に移そうと考えるようになった。その論文とは、次のようなものである。

### 臓器移植後の供与者と受容者の共鳴現象 〈要約〉

目的：臓器移植後に供与者と受容者の間に認められる精神的共鳴現象を客観的に評価すること

対象：臓器移植後、供与者・受容者ともに健康に生存しており意思伝達が可能な二十一症例。心臓移植三例、肺移植二例、肝移植七例、腎移植九例。

方法：臓器移植を受けた受容者とその臓器の供与者をお互いが臓器提供の相手だという事実は伏せた上で同一の検査室におき、共鳴認知解析教本の吉村法に基づいて双方向意思伝達を試み、同時に脳磁波と陽電動脳断層撮影装置にて脳内波動の変位を測定する。

結果：全二十一例中九例（心臓移植二例、肺移植一例、肝移植五例、腎移植一例）で、供与者および受容者の両者に脳波動の有意な共鳴現象を認めた。残りの十二例中八例では共鳴現象は認めるものの統計的解析では有意と認められず（危険率一％）、四例ではまったく共鳴現象は認められなかった。

結論：臓器移植後の受容者とその供与者の間に約四十三％の割合で脳内波動測定にて共鳴現象を認めた。特に心臓移植と肝移植でその割合は高く、逆に腎移植では低かった。今後さらなる症例の検討が必要と考える。

つまり、この共鳴現象を自己体験すべく、この三位一体計画を発案した。ということらしい。

まず自分の臓器を与えた三人の受容者に連絡する必要があるがあった。通常の臓器移植では受容者と供与者の間でそれぞれの個人情報と披露されることなどあり得ない。しかし、わたしの主人の臓器移植の場合は、自分自身の勤める人工臓器開発会社の研究の一環としてあったため、受容者の選別については主人の意思が第一優先され、かつ受容者の個人情報は主人に委ねられた。つまり、主人は受容者がどこの誰であるのかを知った上で自ら選んだということになる。となると三人の受容者と連絡を取ることは主人にとってはさほど難しいことではなかった。

「噂によるとみんな若くてかわいい女の子なんだって？」

「そりゃまあ、当然でしょ。自分の健康な臓器をあげるんだから、それくらい好きなように選ばしてくださいよ。もし同じ立場だったら大沢だってそうするでしょう」

「まあ、そうかもな」

大沢さんは神妙な顔つきで駒を並べながら呟いた。

「いやいや、そりゃないよ。大沢はおばさん好きだからな」

部屋の入り口から陽気な声が響く。井上さんだ。その後ろには岡本さんもいる。

「おばさんはいいですよ。大沢さん」

からかうように岡本さんが突っ込む。

「おまえら……」

大沢さんは敢えて言い返しはしない。主人は無関心を装って、大沢さんに将棋の第一手を打つよう催促する。

「そういや、ここに来る道すがら白川天満宮が小祭で賑わっていたな」

そう言いながら井上さんと岡本さんは将棋盤を囲む位置に胡座をかいて座る。

「祭りのネタは？」

主人は興味なさそうに訊く。

「昨夜午前三時頃、尼崎市大物町の国道で、男女七人の乗った軽乗用車が電柱に衝突し大破しました。乗車していた市内の女子高校生三人と二十歳の土木業の男性二人が頭などを強く打って死亡。二十二歳と二十四歳の鉄筋工の男性二人が肩の骨などを折って重傷。尼崎中央署はスピードの出し過ぎが原因とみて、車を運転していた鉄筋工の男性の回復を待って取り調べる予定。ということです」

岡本さんが手際よくまとめて説明してくれる。

「午前三時かよ」

「ああ。午前三時だ」

「軽自動車に七人だよ」

「ああ、軽自動車に七人だ」

「五人が即死ってことだな」

「昼間からなんて清々しい話なんだ」

「心が洗われるね」

「電柱さん、いい仕事しましたね」

「でも、あまりに電柱さんがかわいそう。馬鹿で無能で淫乱の汚い血を浴びて」

「ガードレールさんは大丈夫だったのかな」

「みんな死ねばよかったのに」

「鉄筋工の二人が重体って、医療費の無駄使いだな」

「この鉄筋工は体を張って電柱の鉄筋を調べたんですよ。おそらく」

「貴重な三つの尾万個がなくなっちゃったよ」

「こんな女子高生の尾万個は腐れ万個だからいいの」

「いわゆる青春の一ページだな」

「電柱さんの一刻も早い回復を望みます」

「皆で電柱さんに合掌」

四人は将棋盤に向かって合掌する。いかに四人の気が合っているかがよくわかる。そんな気がする。でもそうでもないかもしれない。

大沢さんは、あちらの世界では屋台で拉麺屋をやっている。らしい。自前の凝った拉麺を出しているのではなく、すべて即席拉麺である。店の売りは、この即席拉麺に組み合わせて出されるカレーである。といってもこのカレーも即席である。数ある即席既製品の拉麺とレトルトパックのカレーをうまく組み合わせて様々なカレー拉麺を食べられるというのが大沢さんの拉麺屋台の特徴である。趣味は将棋。岡本さんは、あちらの世界では人形制作者である。主にビスクドール（十九世紀に欧州のブルジョワ階級の貴婦人・令嬢たちの間で流行した人形）のレプリカモデルを制作しているらしい。趣味は、本職からの流れで少女機械の製作。少女機械は人形と違って、自家発電によって自動能を有する電脳機械である。井上さんはあちらでは法科の大学院生である。弁護士志望であるが、弁護士余りの現実を目の当たりにして、将来どうしたいのかは未だ不明らしい。趣味はアニメのセル画蒐集。この部屋を訪れる人たちのなかで唯一あちらの世界で結婚しており奥さんがいるらしい。ちなみにわたしの主人の趣味は将棋。ではない。釣りである。あちらの世界では、へら鮎釣りを専門としているらしい。こちらでの釣りは専ら『発言釣り』である。つまりそれは、嘘の情報を流したり、わざと叩かれるような発言をして、それに踊らされる人を見下して楽しむ悪戯だ。最近主人が仕掛けた釣りを紹介する。

昨年、ネオ京都の祇園祭行ったんです。祇園祭の山鉾巡行。そしたらなんか虚体がめちゃくちゃいっぱい山鉾巡行が見れないんです。で、よく見たらなんか垂れ幕下がってて、自爆花火半額、とか書いてあるんです。もうね、アホか。馬鹿か。お前らな、自爆花火半額如きで、普段来てない山鉾巡行に来てんじゃねーよ、ボケが。半額だよ、半額。なんか親子連れとかもいるし。一家4人で山鉾巡行見学か。おめでてーな。よーしパパ自爆祭りに参加しちゃうぞー、とか言ってるの。もう見てらんない。お前らな、残りの半額やるからその自爆花火譲れよと。山鉾巡行ってのはな、もっと殺伐としてるべきなんだよ。山鉾を運行している奴らや他の見物客と、いつ喧嘩が始まってもおかしくない、刺すか刺されるか、そんな雰囲気がいいんじゃねーか。女子供は、すっこんでろ。で、やっと自爆の順番が回ってきたと思ったら、隣の奴が、菊先紅でパーッと、とか言ってるんです。そこでまたぶち切れですよ。あのな、菊先紅なんてきょうび流行んねーんだよ。ボケが。得意げな顔して何が、菊先紅でパーッとで、だ。お前は本当に菊先紅の花火を観賞したいのかと問いたい。問い詰めたい。小1時間問い詰めたい。お前、菊先紅って言いたいだけちゃうんかと。祇園祭通の俺から言わせてもらえば今、祇園祭通の間での最新流行花火はやっぱり、錦冠、これだね。錦冠三尺玉八重芯。これが通の自爆花火の選び方。錦冠とは花卉が垂れ下がる様な息の長い金色の花火。そんな代わり火の温度があまり高くないので明るくない。これ。で、それに三尺玉の八重芯。これ最強。しかしこれを選ぶと次から囃子方にマークされるという危険も伴う、諸刃の剣。素人にはお薦め出来ない。まあお前らド素人は、ねずみ花火でも選んでなさいってこった。

この釣りの餌に引っかかった雑魚は三百匹以上に及んだ。主人はもちろん満足気ではあったが

、目標は千超えだそうだ。

こちらの世界での皆の虚体は様々である。わたしの主人は、普通の若者といった出で立ちで、特徴的なのは髪型がアフロヘアーであることくらいである。大沢さんはチビで小太りで無精髭を生やした冴えない感じの中年男性の姿であり、岡本さんは黒色の学生帽と詰襟の学生服を着た中学生（こちらでは厨房と呼ばれることもある）の姿をしており、井上さんは頭は禿げているが長さが五十センチはあろうかという立派な顎髭を蓄えた仙人のような隠居老人の虚体をしている。皆があちらの世界でどのような実体をしているのかは、わたしの関知し得るところではない。

「田中はどんな戦法で大沢師匠に立ち向かおうとしてるんだ」

井上さんが達観した老人の顔つきで話しかける。

「振り飛車に美濃囲い。で、大沢は居飛車に穴熊囲い。どう、参った？」

から元気な声で主人が答える。大沢さんは黙々と駒を指していく。

7六歩 8四歩 6八銀 3四歩 7七銀  
6二銀 5六歩 5四歩 4八銀 4二銀  
5八金右 3二金 6六歩 4一玉 6七金  
5二金 7八金 3三銀 6九玉 3一角  
7九角 4四歩 3六歩 4三金右 6八角  
4二角 7九玉 3一玉 8八玉 7四歩

途中で岡本さんは、将棋を観ることに飽きてしまい、部屋の隅にある本棚から電子広辞苑を取り出してきて、なぜか四字熟語を唱え始める。

諸行無常 是正滅法 生滅滅已 寂滅為樂

「おいおい、誰かさんがお経を唱えだしたよ」

井上さんがびっくりした顔で主人と大沢さんに話しかけるが、二人とも将棋に集中しているようで反応を返さない。おそらく井上さんは岡本さんにいつもの発作がでる前ぶれではないかと心配しているのだろう。岡本さんの変なお経もどきの呪文のような声が部屋の中に静かに響き渡る。

悪鬼羅刹 暗澹冥濛 異端邪説 姪虐暴戾  
運否天賦 怨徹骨髓 厭離穢土 鬼哭啾啾  
孤立無援 欣求浄土 猜忌邪曲 屍山血河  
醉生夢死 造反有理 湛然無極 魑魅魍魎  
天壤無窮 怒髮衝天 佞惡醜穢 破邪顯正  
咆哮搏擊 泡沫夢幻 磨穿鉄硯 無慙無愧  
銘肌鏤骨 幽寂閑雅 妖姿媚態 六道輪廻

部屋の隅で四字熟語の呪文を唱える岡本さんをまったく無視するように部屋の中央では将棋が打ち続けられていく。

3五歩 6四角 1八飛 3五歩 同 角  
8五歩 6五歩 4二角 5七銀 6四歩  
同 歩 同 角 6六銀右 3四銀 5七角  
4五銀 6五歩 4二角 3八飛 7三桂  
3五歩 6四歩 4六歩 3六銀 同 飛  
6五歩 4五歩 同 歩 3四銀 5三銀  
7五歩 8六歩 同 銀 6六歩 同 角  
4四銀 4三銀成 同 金 3四金 同 金

同 步 4 三金 4 四角 同 金 3 三銀

「七十五手で先手大沢の勝ち」

井上さんの大きな声が響きわたる。

「むうう、くやしいのう、くやしいのう、くやしいのう」

主人がアフロヘアーを掻きむしりながら呻き呟く。

「うへへ、くやしいだろ、くやしいだろ、くやしいだろ」

呼応するように大沢さんが嘲り笑いながら声をあげる。

「田中が大沢師匠に勝とうなんて十年早いわ」

井上さんが主人を咎めるように言葉を放つ。主人はそんな辛辣な言葉に反応することもなくひたすら呟き続ける。

「くやしいのう、くやしいのう、くやしいのう」

するとその文句がなぜか岡本さんに伝染し、岡本さんが主人と同じように別の呪文を唱え始める。

くやしいのう　くやしいのう　くやしいのう  
かなしいのう　かなしいのう　かなしいのう  
はがゆいのう　はがゆいのう　はがゆいのう  
むねんやのう　むねんやのう　むねんやのう

ドドドドドドツという大音響が也阿弥ホテルのすべての窓を震わせる。主人はすぐに視線を窓の外に向ける。続いて、大沢さん、井上さん、岡本さんの順に反応し、最後にわたしも視線を部屋の中から外へと移す。半径十メートルはあろうと思われる大きな火球が北の空からネオ京都の町中へ向かって流れ落ちていく。いつの間にか皆が窓を開けバルコニーへ出て身を乗り出し、火球を注視している。

「来ましたね」

「きたきたきたきたああああ遊星爆弾きたああああああ」

「いわゆる、がくぶるってやつだな」

「おいおい、やばいよやばいよ、やられちゃうよ」

「もう遅いよ」

「大宮あたりに落ちるとみた」

「火壁を簡単に突破しちゃったんですね」

「南無阿弥陀仏」

ズドーンという轟音を響かせて、火球が町中に落下する。同時に火柱が舞い上がる。「おおっ」と皆が感嘆の声をあげる。

「『あしたをはる』、どこに着弾したか調査してこい」

主人から命令が下りる。わたしは「ニャー」と声をあげ、ベランダから空へと飛び立つ。空飛ぶ猫。ネオ京都の町を見下ろしながら火柱が上がった場所へと向かう。

被害にあったのは壬生寺です。ほぼ全壊しています。ここに常駐している新撰組の隊士たちも全員死亡したものと考えられます。つまり現時点においてこのネオ京都を守ってくれる隊は存在しないということになり、この町は非常に脆弱な状態にあると言えます。

わたしの伝言がすぐに主人に伝えられる。

「どこのどいつが何のために」

興味なさそうに主人が呟く。

「って、興味あるわけ？」

つまらなさそうに大沢さんが訊く。

「まあ、少しはね」

取って付けたように主人が返す。

「おそらく、あの潔癖団の仕業でしょう」

岡本さんが会話を継続する。

「ああ、そういえばあいつらここの祇園祭にえらく反対してたそうだね」

主人が岡本さんに訊く。

「自殺を推奨するような祭りは許せないそうですよ」

岡本さんがきっぱりと答える。

「自爆祭は駄目なのか」

大沢さんが疑問を投げる。

「自爆と自殺は違います」

岡本さんが毅然と答える。

「いっしょだよ」

無責任な風に主人が返す。

「違うよ」

大沢さんが反応する。

「どっちでもいいよ」

欠伸をしながら主人が呟く。

「で、その祇園祭を妨害するために火球を撃ったと」

大沢さんが結論を導き出す。

「まあ、そんなところでしょう」

岡本さんが同意する。

「まあ、どうでもいいだろう」

主人が話を元に戻してしまう。ちなみに『潔癖団』とはあくまで主人たちが使う呼称であり、正式名称は『正しい社会を求める市民の会』である。この会とは、この世に存在する正と負の価値観をもつもののうち徹底的に負のものを排除するという原則に従って行動する集団であり、それはかれらに言わせると「世の中の当たり前で普通で真つ当なことを当たり前によいと言えることができる真つ当な社会を望む」ということになる。わたしの解釈では、この世には零と壺が存在しておりそのうち一方のみを選択するということになるのであるが、わたしも含めてこの世、

つまり情報の流れというのは、零と壺のどちらかひとつでは成立し得ない。そんな成立し得ない世の成立を希求するという極めて革新的な集団である。

わたしが也阿弥ホテルに戻ってくると大沢さんと井上さんが将棋の対局を始めていた。主人は傍らでその対局を眺めている。岡本さんの姿はなくなっていた。わたしは窓際の定位置に座り、いつものように漫然と外の景色に目をやる。先ほどの火球着弾による町の喧噪は一瞬のうちに消退してしまい、夕闇が迫ったネオ京都の町には、何事もなかったように祇園祭のお囃子の音が鳴り響いている。

コンコンチキチキコンチキチン  
コンコンチキチキコンチキチン

「こんばんは」と暗い低音の音が響き、村田さんが入ってくる。村田さんはあちらの世界では無職で生活保護だけで優雅な生活をしているという強者である。こちらの世界での虚体は、[ねずみ男](#)という妖怪漫画のキャラクターの姿をしている。一般に、電腦世界での虚体に関しては、漫画のキャラクターやあちらの世界での有名な俳優などの姿を借りる場合が多いが、どちらかというそれは電腦世界の初心者であり、こちらの世界に馴染んでくるとそういう借り物の姿はあちらの価値観を引きずっているように感じられるのか、だんだんこちらでのオリジナルな姿を身につけるようになっていくようだ。確かにそうだ。

村田さんが主人に自分の方に来いと手招きする。主人は重そうに腰を上げ、いそいそと村田さんの方へ向かう。村田さんは主人の耳元でこそこそと話し始める。

「最近、何かいいブツは手に入ったかい？」

主人は両手を広げて、「まったく」と答える。

「この前もらった『[滑空機](#)』はなかなかよかったんだけどね、だけどこれも回数依存が出てきて二十回負荷したあたりでほとんど効かなくなっちゃった。どうにかなんないかねえ」

村田さんが困った顔で主人に訴えかける。

「つまり『[滑空機](#)』でもとべなくなったってことだ」

涼しい顔で主人が言葉を返す。

「とべない、とべない。いや最初は滅茶苦茶とべただけだね。すげえ気持ち良かったすよ」

村田さんの顔がほころぶ。

「脈楽の回数依存性ってのは未だに現代医学では解明されていないからねえ。大体、脈楽自体がどうして脳に多幸福感をもたらすのかも解ってはいないし。いろいろと論文はあるんだけどね」

主人が難しい顔を返す。わたしの脳内に代表的な論文が明滅する。

人工心臓における心拍動のリズムと脳内波動の変化について <要約>

目的：人工心臓移植受容者において特定心拍動リズムにより特異的脳内波動が惹起されることを確認すること。

対象：人工心臓移植後、一年以上経過している健常受容者十例。

方法：対象例の人工心臓の拍動調節電腦中枢部における記憶装置にさまざまな拍動リズムを記録した素子媒体を負荷し、生体の反応を記録する。具体的には、血圧測定、血液検査にて種々の

活性物質の定量、脳磁波と陽電子脳断層撮影装置による脳内波動の測定および近赤外光脳機能計測装置にて高次脳機能を描画する。

結果：全例で血圧に定型的な変動は認められず、血液中に何らかの活性物質の有意な上昇も認められなかった。また、七例で脳磁波および脳内波動ではテトラヒドロカンナビノール吸引時と同様な変化を示した。これらの症例では高次脳機能計測においても視床下部から前頭葉にかけてテトラヒドロカンナビノールによるものと同様な変化が描出された。

結論：人工心臓移植受容者の人工心臓にある特定の心拍リズムを負荷するとその受容者にテトラヒドロカンナビノールによって惹起されるものと同様な脳内変化が認められることがわかった。今後は特定拍動リズムの特異性および脳内変動の多様性についてさらなる検討が必要である。

#### 人工心臓における特定心拍動リズムによる脳内波動変化の負荷依存性について <要約>

目的：特定心拍リズムによって人工心臓移植受容者の脳内に惹起されるテトラヒドロカンナビノール様変化の負荷依存について評価すること。

対象：人工心臓移植後一年以上経過している健常受容者で、特定心拍リズムにて脳内にテトラヒドロカンナビノール類似変動が生じる八例。

方法：対象例の人工心臓に特定心拍リズム（人間解体第三楽章）を負荷し、脳磁波・陽電子脳断層撮影装置・近赤外光脳機能計測装置等にて脳内波動変化を測定し、その反応の心拍リズム負荷に対する時間依存性（八時間まで）および回数依存性（毎日一回五十日間まで）について検討する。

結果：全例において八時間までの時間であれば脳内惹起波動に変化はなく、依存性は認められなかった。一方、回数については、二十日経過した時点で、脳内惹起波動の変動割合を示す $\epsilon$ 定数が徐々に減弱していく現象が五例で観察され、残り三例では三十日を経過した段階で同様の現象が認められた。

結論：人工心臓における特定心拍動リズムによる脳内波動変化は回数依存性を示し、三十回以上負荷した場合はその反応が徐々に減衰していくことがわかった。さらなる症例の積み重ねが必要と考える。

ちなみに主人の話によると「さらなる症例の積み重ねが必要である」というのはつまり「これ以上症例を積み重ねるつもりはありません。もしこれ以上症例が増えたら否定的結果になる可能性がありますから。この仕事はこれで完結です。そのあたりの空気を読んで下さい」という意味であるようだ。てかありえないような。学術論文でそのようなことがあっていいのだろうか。それはそれとして、簡単に解説しておく、特定心拍リズムというのが脈楽のことであり、これまで様々な脈楽が創作され闇ルートで流通している。代表的なものとしては、第一世代のものとして「[対自核](#)」「[電子瞑想](#)」などがあり、第二世代として「[人間解体](#)」「[平行喪失世界](#)」、そして最新の第三世代として「[滑空機](#)」「[先端論理](#)」などがある。基本的には様々な波長の電子波の集合体であるため、音楽のリズムと同じようなもので脈楽そのものを音楽と考えていいのかもしれないが、重要な点は脈楽は決して耳で聴こえるものではないということである。つまり人間の可聴域にある周波数ではない。人工心臓の拍動調節中枢に作用し、心拍動にあるリズムを創り出すことによりその効果を発揮するというものである。またテトラヒドロカンナビノールとは大麻の主成分であり、テトラヒドロカンナビノール様の脳内変化とは、多幸感や聴覚鋭敏化、幻覚症状等の精神症状を指す。通常の大麻吸引では頻脈や徐脈、血圧上昇などの循環器変化も認められるが、人工心臓ゆえにそういう変化は認められない。ちなみに拍動のない人工心臓（これだと人工弁が必要とならないためより簡単な構造となる）というのも過去に開発されたが、動物実験で拍動がない状態では約三ヶ月しか生存できないということがわかっている。また、常に一定の血流しか生み出さない人工心臓では、その移植受容者の感情そのものが消失してしまうということも報告されている。

「その、原理はどうでもいいから、とにかく新しいブツって入手できる見込みはないのかい」

「それは『[ナカタくんとコシジマさん](#)』次第だな」

闇ルートで主人にブツつまり脈楽を運んで来てくれるのは、『[ナカタくんとコシジマさん](#)』という三毛猫だ。二匹ではなく一匹で、[天鷲毛を欺くほどの滑らかな毛を満身に纏った](#)不思議系猫だ。わたしのように空を飛ぶことはなく、軒下や屋根の上をすばやく走って、いつの間にかこの部屋の隅に来ていることが多い。そしてその口に新たな脈楽が記憶された媒体が入ったカプセルを咥えている。

「あの猫のことだな。『あしたをはる』と違って、なんか狡猾そうな猫だろ」

村田さんはわたしを褒めているつもりだろうか。

「ああ、でもあの猫のおかげでぼくたちはとぶことができるわけだからね」

主人は『[ナカタくんとコシジマさん](#)』に肩入れする。といってもわたしのことが嫌いなわけではない。それはない。

「あの猫と連絡をとる方法は？」

村田さんが少し苛ついたように話す。

「さあねえ、知らない。こちらから連絡はとれないんだ。一応、脈楽って違法だからね。向こうも気をつけてるんじゃない」

主人は素気なく返答する。脈楽は確かに違法である。もう少し詳しく説明すると人工心臓を移植された人が脈楽を所持することが違法である。健常者が脈楽を所持していても何ら罪はない。

また、脈楽を制作すること自体も違法ではない。ただし、脈楽を人工心臓移植受容者に売るとは違法である。第二世代の脈楽までは違法うんぬんは問題とはならなかった。それは人工心臓移植患者そのものが少なかったからである。しかし、全置換型第五世代の新阿久津型が登場してからその性能の向上と相まって人工心臓を移植する症例が格段に増加した。そしてそれに伴い、脈楽で大麻と同じような感覚が経験できるということも広まり、それが闇社会の収入源になっていき、社会問題化することになったのである。人工心臓の性能が向上したといっても生の心臓に敵うわけではない。真つ当な心臓疾患患者は自分に移植される心臓にはやはり人間の生の心臓を希望する。しかし、その数は少ない。脳死患者からの心臓移植はやはり少ないのである。ではどうするか。それは闇社会の人間ならすぐに思いつく類のものである。つまり、生の心臓を供給する。経済的に困窮している人に話を持ちかけるのである。あなたの心臓を高価な値段で買ってあげると。その代わりに、あなたの体内には人工心臓が移植されると。生の心臓と人工心臓の差し引きでもあなたにはかなりの儲けがあると。人工心臓の性能がもうひとつであった頃は、自分の心臓を人工のものに差し替えることは通常生活にも不利益をもたらすことになり、志願者は限られていたが、新阿久津型の登場と脈楽の周知により、逆に人工心臓により快楽的な生活ができると知れわたり、その上、人工心臓移植そのもので儲けることができるとなると移植志願者は経済的困窮者の間で瞬く間に増加した。また、脈楽もいよいよ第四世代のものが開発され闇市場に出回り始めたという噂もある。この第四世代のものは、テトラヒドロカンナビノール様の刺激を超え、メタンフェタミン級の刺激が得られるという黒い噂が広がっている。こうなると脈楽もいよいよ覚醒剤と同じような扱いを受けかねなく、そうなるとその取り締まりも一層厳しいものになると思われる。

「ああっ、より深い刺激が欲しいよおお」

村田さんが叫ぶ。

「いらねえよ」

「ああ、いらねえ」

大沢さんと井上さんが呟く。

「おまえら、将棋ごときで満足してんじゃねえよ」

村田さんが、大沢さんと井上さんに苛立ちの直球を投げる。

「将棋は奥が深いぞ」

「ああ、奥が深い」

「厨房にはわからんだろうな」

「わからん、わからん」

二人は冷たく村田さんをあしらう。

「まあ人工心臓でない奴らにはわからんか、なあ田中」

村田さんは主人に同意を求める。主人は村田さんの話を聞いていない素振りで大沢さんと井上さんの方へ戻っていく。そして再び、二人の対局を観戦する。ひとり取り残された村田さんは、部屋の隅にある主人の机の上から二段目の抽斗を開け、そこから脈楽の記録された音盤を取り出す。

「今日は『先端論理』を借りるよ」

どうやら『先端論理』は未だ回数依存症を示していないようだ。そうなんだ。主人は村田さんの方を振り向くこともなく、左手を挙げて手首を直角に曲げて了解の合図を示す。村田さんは音盤をデッキに詰め込み、ヘッドフォンを頭に付けて畳の上に仰向けに寝転ぶ。デッキのスイッチを押すと脈楽があちらの村田さんの人工心臓に組み込まれた電脳中枢の記憶端末に転送されていく。そして、人工心臓のポンプが独特のリズムで拍動し始め、こちらの村田さんの表情が徐々に陶酔のそれに変化していく。

だあんだん浸みってくる、軽くなる、浸みてくうる。

だあんだん浸みってくる、軽くなる、浸みてくうる。

「あああ、これこれ、これいいわああ。新世界が見えるわ」

村田さんが快樂の渦にのみ込まれていく。主人も大沢さんも井上さんも皆将棋の方に意識は集中し、村田さんの変化にはまったく関心を示さない。それはそうなんだ。村田さんは、とびながら何ごとかをぶつぶつと呟き始める。

より強く より速く より良く より気高く

より鋭く より軽く より高く より久しく

より熱く より凄く より硬く より激しく

より深く より清く より惨く より虚しく

より甘く より円く より潔く より美しく

昼前から也阿弥ホテルには主人と大沢さん、岡本さんが集まっている。皆がホテルのベランダから身を乗り出し北西の方向を眺めている。そこには金閣寺が炎上している姿が見える。金閣寺の周りには多くの人だかりができ、皆が火のついた弓矢を金閣寺めがけて射っている。

「誰が放火したんだ？」

「坊さん」

「おいおい」

「本当は、あそこの住人です」

「坊主じゃないのか？」

「こちらでの役柄は知りません。あちらでは某テレビ局の取締役らしいです」

「テレビ局って、有料無料どっちだ？」

「無料の方です」

「やくざの方だな」

「そうだな」

「儲かってるのか？」

「でしょうね、ですから金閣寺なんて所有できるんでしょうね」

「そりゃそうだよ。ネオ京都で金閣寺に住んでるなんてただものじゃないよ」

「でも、お前、無料テレビって見ることある？」

「ないけど」

「ぼくも」

「だろ……どうやって儲けてるんだろう」

「見る馬鹿も多いんだよ、きっと」

「それに、裏家業があるらしいですし」

「裏家業ね、そんな気がするね」

「で、放火のネタは何だよ？」

「そんなこと、『あしたをはる』に訊いた方が早いだろ」

そう言って主人がわたしの方を見る。早速、わたしは脳内網組織に侵入し情報を集める。

## 金閣寺炎上まとめ（現在進行中）

事の発端は、七月十四日の金閣寺所有者『太陽の塔』の発言だった。

たった今、御三人様、頭を垂れて、お帰りなされました。藍生会病院副院長本田義男五十九歳、総務課長辻本茂五十二歳、看護師長藤尾元子四十八歳のお三方でございます。可哀想に鷹の前の雀のようで、

「あんたらは医療に従事する資格があるんか？」

などと質問され、

「おんどりゃ、こちとらがまじになりゃ、この事件をテレビで大々的に流すことができんだぞ、ぼけたれが」

と優しく声をかけられ。

「これを肝に命じて今後は…」

と呆け副院長が言いかければ、

「いや、おんどれでは話にならん。院長出さんかい」

と諭され。

「お前ら、院内規則で、すぐには患者家族に謝るな言われとるんか？」

と質問されて、

「いえ、あれは管理者である私どもの指導不足でございまして」

とあたふた右往左往し。まあ、ワタクシは人間の出来た優しい不良おじさんでありますから、最後は、「二度とこのようなことをおこすな！」と一喝して、帰って良しと告げたのであります。あ、今度同じようなことがあったらニュース速報で報告して、病院抹殺。加えて、民事訴訟で一億要求するからな、と念を押しておきましたけれど。テレビ局を甘くみるなよ、ともね。カミサンも、母親が食事を喉に詰まらせて死にかけるなんて、ホントに腹に据えかねたらしく、怒髪天を衝く勢いだったのですが（当たり前でございますよね）、「これでもういいか？」と尋ねて何とか宥めた次第でございます。本当にねえ、世の中バカが多くて、いちいち指導して差し上げるのも疲れるのでございますわ。

### この発言の背景

『太陽の塔』は、某在京民放の取締役。現場からの叩き上げで、数多くの人気番組を制作してきた局内の重鎮。そのカミサンは、同局の元女性アナウンサーで『太陽の塔』と職場結婚し、引退。現在は専業主婦。男女一人ずつの子供がおり、それぞれ都内有名私大附属小学校と中学校に通う。この『太陽の塔』の義理の母沙也佳九十二歳が、肺炎にて藍生会病院に入院中、看護師が介護しながら夕食を食べさせていたところ食べ物（お粥）が気道に詰まり窒息状態になるが、緊急蘇生処置によりなんとか死は免れる。しかし現在も全身状態は芳しくなく集中治療室にて加療中である。沙也佳は認知症を患っており不穏な行動をするため四肢はベッドに拘束されていた。病院側は、沙也佳の年齢および全身状態から今回の事態はやむを得ないものと説明したが、親族である『太陽の塔』およびそのカミサンは承伏できず、訴訟をちらつかせながら病院にきちんとした釈明を求めた。

「おいおい、まるでやくざの言葉遣いだな」

大沢さんがあきれた顔で同意を求める。

「まじですかね」

びっくりした顔で岡本さんが同意する。

「取締役がこんなんでもいいのか、おい民放よ」

主人がさらに突っ込む。

「『あしたをはる』よ、炎上現場を実況中継してくれ」

主人の命令を受け、わたしは金閣寺へと飛ぶ。眼下では群衆が金閣寺へと向かって火炎瓶を投げたり、先に火のついた灯油綿を付けた弓矢を射っている。暴徒と化した群衆の実況をわたしは主人に転送する。

「テレビ局（笑）」

「実名で脅迫してるよ」

「不良おじさん（笑）」

「九十二歳まで生きるなババア」

「認知症患者を病院に丸投げするとは酷い」

「こいつら絶対付き添いなんてしてねえよ」

「心の中では、病院の過失で死んでほしいんだよ。そしてどうやって慰謝料とろうかって計算してんだよ」

「お笑いとかバラエティしかやらないテレビって糞だろ。死ね！」

「太陽の塔（笑）」

「芸能人ってのはほとんどやくざ絡み。だからその芸能人を頼りにするテレビ局もやくざに頭が上がらない。みんな、薬中毒だよ」

「九十二歳沙也佳（笑）」

「大麻覚醒剤が必要な方はテレビ局員にご相談を。すぐに調達してくれます。これ豆知識な」

「テレビ局をなめるなよか。すげえな。こいつのテレビ局に広告出してる会社すべてに苦情メール送ろうぜ」

「こいつのテレビ局の苦情係に電話しといたよ。丁寧な対応だったな。くそったれが」

「これ、耳をかつぽじってよく聞けや。『無料テレビの視聴者層は程度が低いんですよ。その辺を僕たちは重々知った上で番組を制作しているわけです。程度が低いってのはいろんなことに大した関心を持ったりしない馬鹿ってことです。関心持つ人は、有料の専門テレビしか見ませんから。私たちテレビ局員も自分たちそれぞれのこだわりってのがありますから有料テレビしか見ませんよ。自分たちの作ってる番組なんて糞みたいなもんだと思ってます。糞みたいな視聴者に対して糞みたいな番組を作っている僕たちは真性の糞ですよ。それくらいわかってます。それでもこんなテレビ局だって必要なんです。いつの世、いつの時代にも大勢の糞がいるわけですから。これが大衆社会の一面ではあるわけです。〇〇テレビ局主査渡辺誠談』」

「糞呼ばわり来たあああああ」

「斜陽テレビ局がなにをぬかすか」

「おい、お前ら、太陽の塔だつてつらいんだよ。馬鹿相手に馬鹿番組作つてんだから。どこかに憤懣をぶつけないとやってられないんだよ」

「太陽の塔よ、大志を抱けてか」

「馬鹿に限って、相手を馬鹿呼ばわりするんだな」

「お前らも皆馬鹿ってことか」

「視聴者を糞呼ばわりする渡辺は許せん！」

「渡辺は正直者だから許せる」

「悪いのはカミサン」

「悪いのはラモス」

まさに混沌とした状況で皆が無責任に言いたいことを喚き散らしている。

「なんか正論ばかりだな」

主人のつまらなさそうな声が聞こえる。

「九十二歳に一億ってのもすごいな。さすが沙也佳だ」

おばさん好きの大沢さんの声が響く。でも沙也佳さんはおばさんではなく、お婆さんだと思う。確かにそうだ。

「一億はないです。過去にきちんとした事例がありますから」

岡本さんの冷静な声が聞こえ、その事例がわたしを経由して引き出されていく。

### 『食事で窒息死 介護業者に賠償命令 地裁茨木支部 介護士に過失』

大阪府茨木市で二〇〇二年十月、重い身体障害のある少年（当時十五歳）が、食べ物をのどに詰まらせて死亡したのは、介護士が注意義務を怠ったことなどが原因として、両親が派遣元の介護事業所と介護士などを相手に、計約六千万円の損害賠償を求めた訴訟の判決が二十四日、大阪地裁茨木支部であった。与謝野清裁判長は事業所と介護士に計約二千万円の支払いを命じた。両親は「事業所の責任が明確でない」として控訴する方針。

訴えていたのは、同市鮎川、百貨店勤務花房拓也さん（四十七）と紀子さん（四十三）で、死亡したのは二男、慎治さん。

判決によると、慎治さんは二〇〇二年十月二十四日夜、男性介護士の介助を受けながら食事中、食べ物を気管に詰まらせて窒息状態となり、病院に運ばれたが、翌二十五日死亡した。

与謝野裁判長は「介護士が早期に事業所へ連絡をして指示を受けていれば、死亡は防げた」と指摘、介護士の過失と死亡との因果関係を認めた。また、事業所も危険を予防すべき責務があったとした。

「十五歳で、二千万円だから九十二歳なら五十万円くらいでしょうかね」

岡本さんがしみじみと計算する。

「地裁でしょ。控訴して最終的にははどうなったんだよ」

主人が苛ついた感じで岡本さんに訊く。

「高裁では、地裁判決を支持。最高裁では、逆転判決で介護士および介護事業所とも無罪となったようです」

「なんだ、当たり前過ぎて、くそ面白くもない判決だな」

大沢さんが吐き捨てる。

「いやいや、真つ当な判決でよかったんですよ。これがもし地裁通りの判決になってたら今頃介護の必要な人たちが路頭に迷っていることになっていたでしょうから」

岡本さんの子供声が一番理知的に聞こえる。

「まあ、とにかく『太陽の塔』の言っていることがどれだけ荒唐無稽なのかはわかったわ」

主人が苦笑しながら言葉を続ける。

「で、『太陽の塔』は消火作業とかしなかったわけ？」

わたしは昨晚からの過去の記録を調査し答える。

「してます。してますが、消火にはなってません。一応、報告します」

## 『太陽の塔』の反撃

「こちらの世界の特徴として匿名性というのがございます。素性を明かさずに仮の名前だけで発言することが出来るわけですね。ですから、何処の寄合所を見ても、糞しようもない揚げ足取りや罵り合いばかりが横行するわけでございますよ。これは要するにあちらの世界では、生まれてこの方一度も手を挙げて発言することをしなかった、あるいはする必要がなかった、あるいはする機会がなかった馬鹿者どもが、ようやくと何がしかの発言権を得たと勘違いしておる、その証明でございます。てめえのことだよ、さっきから必死になって、この俺様に罵詈雑言送り付けてくる童貞野郎。そこへいくとワタクシは、素顔も素性もぜ〜んぶ、さらけ出しておりますが。これどういうことかと申しますとね、自分の発言には全部責任を持っているということでございます。糞にも分かりやすいように言ってあげると、いつでもかかって来んかい、ど素人。てめえ、誰に向かってゴロ巻きよるんじゃ。という意味でございますね。人さまのお宅を拝見に行くと、時々同じような被害にあわれてるのを発見して悲しい思いをしておりましたが、しかし、そんな発言、いつでも簡単につぶしてやれるのがこちらの世界の良いところ。皆様方も、こういう糞には発言権なぞないことを教えてやりましょうよね」

「おいおい、困った輩だね。自重しろよ」

「これこそ火に油を注ぐというんですね」

「もっと炎上しろって、応援したくなるねえ」

主人たちは三者三様に『太陽の塔』を罵っている。わたしはいつまでこの状況を実況しなければいけないのであろう。金閣寺を包む炎はその勢いを増していくばかりだ。

ヒューーーーーー

空気を切り裂く鋭い音が響きわたる。大文字山の方からムササビのような物体が飛行してくる。凝視するとそれは頭に鐵假面を被り背中にロケットエンジンを付けた見覚えのあるヒト型飛行物体である。

「上空に怪人二十面相が現れました」

わたしは主人に報告する。

「おいおい、とうとう二十面相の登場かよ」

主人が驚きの声をあげる。

「いやいや、ちょうどいい頃合いでしょう。このまま炎上させてると明日の山鉾巡行に影響がでちゃいますからね」

岡本さんが冷静に分析する。

「おれは久々に怪人二十面相を見るな。まあ、楽しみだな」

大沢さんが暢気な声で呟く。

怪人二十面相とは、炎上を終息させる仕事人である。この終わらせ方が変わっている。火事場に消炎物質を投下して炎をおさめるというのではなく、火炎放射によってさらに炎上させ、燃焼するものがなくなるまで徹底的に燃え尽きさせるというものである。完全燃焼によって炎上を駆逐してしまうその人こそ怪人二十面相なのである。

金閣寺の上空に静止した怪人二十面相が、背中のロケットエンジンから火炎放射器を引き出し、その放射口を金閣寺に向ける。閃光とともに火炎が真一文字になって金閣寺へと向かって疾駆していく。と同時に怪人二十面相が雄叫びをあげ、鐵假面が回転しながら様々な顔へと変化していく。

われは怪人二十面相。

しかるにある時は南極探検隊の白瀬中尉。

ある時は電人M。ある時は糸女郎。ある時は夜光人間。

ある時は巨人引力。ある時は鉛人形。ある時は吸血姫。

ある時は少女仮面。ある時はせむし男。ある時は身毒丸。

ある時は鉄人Q。ある時は腰巻お仙。ある時は偶然童子。

怪人二十面相の叫び声がだんだんと大きくなり放たれる言葉は支離滅裂なものへと変わっていく。その姿は残酷演劇における狂気の舞台俳優を想起させる。確かにそんな感じだ。

奴婢訓 煉夢術 阿呆船

青頭巾 邪宗門 花屋敷 電子城

東京零年 阿片戦争 夜叉綺想 盲人書簡

花札伝綺 犬狼都市 模造石榴 少女都市 鉛の心臓

椅子と伝説 ねじの回転 地球空洞説 疫病流行記

死のような死 大山デブコの犯罪 青森県のせむし男

赤い鳥の居る風景 霧囲気のある死体 そのひとではありません

「そうです！そのひとではありません！そのひとではありません！そのひとではありません！そのひとではありません！そのひとではありません！」

怪人二十面相がその狂気を爆発させる。

「よっおお、いいぞ、怪人二十面相！」

怪人二十面相のいつもの地下演劇のような演出に大沢さんが拍手喝采を送る。

「厭きないねえ」

主人が呆れた声で呟く。

「これで明日の山鉾巡行も無事開催されますね」

安堵の声を岡本さんがあげる。

金閣寺の周りで騒いでいた群衆は怪人二十面相の一挙手一投足に歓声をあげる。そして、砲丸球のような形をした、過塩素酸塩類、過マンガン酸塩類や重クロム酸塩類などの酸化性固形物を金閣寺に向かって投げる。爆発がさらに爆発を誘発していく。

怪人二十面相の容赦のない火炎放射を浴びた金閣寺は外壁が燃え尽きて瓦解していく。とそこから太陽の塔が現れる。一九七〇年に大阪で開催された万国博覧会の象徴がその姿を現す。未来を表す黄金の丸い顔は火炎の熱で真っ赤に煮えたぎっている。そして、徐々にその丸い形が熱で溶けていき変形していく。群衆が太陽の塔の正面胴体に描かれた現在を表す顔にトリニトロトルエン砲丸球をぶつける。大爆音とともに太陽の塔の胴体が粉々に飛散する。その粉塵をも焼却してしまおうと怪人二十面相は火炎放射の勢いをあげる。群衆が喚く。

「死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね！」

「くたばれへたればかたれくそたれあっぼんたれ、太陽の塔」

「怪人二十面相、いい仕事してますね」

「この速さなら言える、『ぼくは仮性包茎です』」

「怪人二十面相、お疲れ」

「かけええええ、二十面相」

「究極の紋切り型だな」

「少女仮面が好き」

「小林少年はどこにいる」

「ああああ、すっきりした」

「こんなエロでは抜けません。抜けるのは、カズ」

「江戸川乱歩は盗撮マニア。これ豆知識な」

「大団円、大団円だ。お家に帰ろう」

「いやいや、仕事は終わらない」

徐々に炎が小さくなっていく。それとともに、群衆も三々五々散らばっていく。金閣寺のあった場所には黒い焼け跡だけが残し、硝煙の臭いが漂っている。怪人二十面相は火炎放射器を仕舞い、ロケットエンジンを噴射して東の空へと飛び去っていく。その姿を見て、まだ残っていた群衆がパラパラと寂しく拍手をする。まるで三文芝居が終わったかのように。

「久々に面白い見せ物を観たな」

大沢さんはそう言いながら将棋盤の方へと向かう。

「前回の怪人二十面相の出動はいつだったかな？ねえ、『あしたをはる』」

岡本さんがわたしに尋ねる。也阿弥ホテルへの帰路についているわたしは直ぐに情報を転送する。

「怪人二十面相の出動は二年三ヶ月と七日ぶりということです。前回の炎上事例は、『尻毛開帳馬鹿っプル』というものです」

「題名だけでどうでもいいわと思うわ」

主人が投げやりに呟く。

「その事件、ぼくは覚えてますよ」

うれしそうに岡本さんが話す。わたしは也阿弥ホテルのいつものベランダに到着する。主人は岡本さんを見下ろすように大沢さんの元へと向かっている。二人は将棋の対局を始めるようだ。いつものことだ。

「そういや、三位一体計画は明日だったよな」

大沢さんが主人に訊く。

「ああ、そうだけど」

主人が答える。

「もうちょっと詳しく説明してよ。どこでどうしてどうするんだよ。勿論、実況してくれるんだろ」

大沢さんが懇願するように主人に話しかける。

「ううん、そうだなあ……」

主人は勿体ぶったように少しずつ話し始める。

「明日ね、午前十時過ぎに四条河原町の阪急阪神百貨店最上階の喫茶『天井桟敷』で会う予定」

「午前十時って、山鉾巡行の真っ最中じゃないか。それも四条河原町って」

驚いた顔で大沢さんが主人に訊く。

「そうなんだよ。でもね、仕方がないんだ。受容者の一人が広島から来るんだけど、どうせなら祇園祭の山鉾巡行を観たいっていうんだ」

淡々と主人が答える。

「午前十時にその喫茶って開いてるんですか？」

訝しげに岡本さんが訊く。

「そう、そんな日でも通常営業らしいんだ。開店が十時ちょうど。だから早めにいって開店まで並んでおこななくちゃあね」

「山鉾巡行は午前九時始まりですから十時というのはある意味中途半端な時間で案外空いているかもしれませんね」

岡本さんがいつものように冷静に分析する。

「そうだといいんだけど。場所的には迂回しを真上から俯瞰できるっていう絶好の場所だからね」

主人が不安げに答える。

「いえいえ、おそらくそんな絶好地に限って皆に知られてないってことが多いんですよ」

岡本さんが慰めるように答える。

「で、その受容者の三人ってのはどんなメンツなんだい」

大沢さんが興味津々といった顔つきで主人の顔を伺う。主人はそんな大沢さんに答えるのが面倒くさいようで、「『あしたをはる』、皆にデータを見せてあげて」とわたしに命令する。

『実験体3 超こ5り786ね』の臓器移植における受容者のプロフィール

心臓移植

受容者氏名 脇野綾香

移植時年齢 十七歳

身長 一六〇cm 体重 五〇kg 血液型 A型 (+)

住所 広島

疾患 拡張型心筋症

#### 肝臓移植

受容者氏名 大西有香

移植時年齢 十七歳

身長 一六一cm 体重 四七kg 血液型 A型 (+)

住所 大阪

疾患 肝内胆汁鬱滞症

#### 腎臓移植

受容者氏名 檜本彩乃

移植時年齢 十六歳

身長 一六三cm 体重 四八kg 血液型 A型 (+)

住所 奈良

疾患 ネフローゼ症候群

ちなみに『実験体3 超こ5り786ね』というのは主人のことであり、詳細は見事に閲覧不可となっている。

「なんか三人とも似通ったプロフィールだな」

大沢さんが不満げに呟く。

「つまりこれが田中さんの嗜好であるということでしょう」

からかうように岡本さんが主人に話しかける。

「まあ、そういうこと」

主人は悪びれることもなく、あっさりと答える。

「で、連絡とった時の反応って、どうだった？」

大沢さんがなおも突っ込む。

「ううん、そうねえ、心臓の綾香は素直な感じだったかなあ、今は広島で美容師の見習いやってるらしくて、三位一体計画についてはよくわからないらしくて理解しようとしなかったけどまあ面白そうだし、京都までの旅費を出してくれるなら祇園祭見学も兼ねて会ってもいいと言ってくれた。肝臓の有香はちょっと変わった感じでなかなか話も進まなかったんだけど、大阪でバイトしてるって言ってたな。何のバイトかは知らない。こっちが熱心に説得して何とか山鉾巡行を見れるという条件で来てくれることを約束してくれたけど、けどこいつが一番不安。腎臓の彩乃はおとなしい感じの話し方で一番好感が持てたな。奈良から京都の大学に通ってるってことで、会うことには何も問題ないみたいだった。三位一体計画にもそれなりに興味を示してくれたしね」

主人はわたしが呈示した各人のデータを見ながら思い出すようにゆっくりと話した。

「おいおい、もうみんな名前と呼んでるわけ？」

大沢さんが参ったといった感じで主人に問いかける。

「いや、まあ、自分の中で呼ぶ時はね、それくらいいいじゃん」

照れ臭そうに主人が答える。

「そうですよ、それくらいいいですよ」

岡本さんが主人に同意する。

「まあ、そうだな。ともかく、みんな来てくれたらいいのにな。絶対実況中継頼むよ」

大沢さんが優しく主人に問いかける。

「ああ、みんな来てくれるかどうかは知らないけど、どちらにしても実況中継だけはするから、任しといて」

主人が自分を励ますようにやや大きな声で答える。すると主人と大沢さんの視線は将棋盤の上に注がれ、二人の関心は将棋に向かう。岡本さんは所在なさげにわたしの元へと来て、わたしの体毛を優しく撫でてくれる。駒を打つ音が静かに部屋に響きわたる。緩やかに穏やかな時間が流れていく。

「ワンツースリーフォ いちにのさんはい、か……」

将棋に集中しながらも主人が漫然と呟く。

「なに、それ？」

大沢さんが興味なさそうに尋ねる。

「いや、肝臓の有香が呟いてた言葉。三位一体計画について話したらそれは結局、『ワンツースリーフォ いちにのさんはい』ってことですよねって言うんだよ。なんじゃそりゃ？ってこっちは思っちゃうよね。でも、その後、ずうっとこの『ワンツースリーフォ いちにのさんはい』が頭に残ってるんだ。で、なるほど確かに三位一体計画は『ワンツースリーフォ いちにのさん

はい』だって納得してしまったわけ」

主人がしみじみと話す。

「なるほど、小娘に教えてもらったわけだな。確かに『ワンツースリーフォ いちにのさんはい』ってのは言い得て妙だな。前から訊こうと思ってたんだけど三人の臓器と田中が合体するなら四位一体じゃないのか？」

大沢さんが手際よく将棋の駒を打ちながら主人に訊く。

「いやいや、三人の臓器が三位一体になってぼくと合体して昇天するってことだからやっぱ三位一体でいいわけ。わかります？」

薄笑いを浮かべて主人が答える。

「まあ、都合のいい解釈だわな」

大沢さんが呆れた風に言葉を返す。

「『この世に事実など存在しない。存在するのは解釈のみである』って、あのニーチェも言うてることだし」

そう言うと主人は、またあの言葉を何度も呟き始める。

ワンツースリーフォ いちにのさんはい

ワンツースリーフォ いちにのさんはい

わたしを撫でる岡本さんの手の力が徐々に強くなっていく。そして、主人の呟く言葉が岡本さんに伝播し、岡本さんがいつものように変な呪文を唱え始める。

ワンツースリーフォ いちにのさんはい  
ワンツースリーフォ いちにのさんはい  
いってきまあす。いってらっしゃい。

ただいま。おかえり。

いってきまあす。いってらっしゃい。

ただいま。おかえり。

「いってきまあす」という岡本さんの声を聞き、わたしは暗澹とした気持ちになる。「いってきまあす」は岡本さんが狂い始める前兆なのだ。わたしは危険を察し、すぐに岡本さんから跳び離れる。岡本さんは、「いってきまあす。いってらっしゃい。ただいま。おかえり」を繰り返しながらベランダへと出ていく。そして、いつもその隅に置いてある金属バットを手にして、思いっきり素振りを繰り返し始める。ブンブンと金属バットが空気を切り裂く尋常ではない音が響きわたる。

いってきまあす。いってらっしゃい。

ただいま。おかえり。

岡本一樹です。元気です。

吉田康子です。リュウマチです。

ついに吉田康子の名前まで登場してきた。こうなるとこの発作がもうおさまることはない。吉田康子とは岡本さんの小学校の同級生である。当時、朝の授業開始の前にクラス全員が自分の健康状態を報告するのが習慣となっていたようで、ひとり一人出席番号順に起立して、「赤木浩三です。元気です」とか「伊吹律子です・風邪気味です」というように報告したらしい。ほとんどの生徒が「〇〇です。元気です」というパターンであったが、出席番号が一番最後の吉田康子だけはいつも決まって、「吉田康子です。リュウマチです」だったそうだ。岡本さんにとっては、吉田康子そのものの記憶はそれほど明瞭ではないが、「吉田康子です。リュウマチです」という文句だけはしっかりと脳裏に刻まれて何かの拍子で意識上に表出してくるようだ。

ますます岡本さんの声が大きくなっていく。素振りをしていた金属バットが木製ベランダの手摺りに振り落とされる。バキッと骨が折れたような音を発して手摺りが砕け散る。

岡本一樹です。元気です。

吉田康子です。リュウマチです。

岡本一樹です。元気です。

吉田康子です。リュウマチです。

岡本さんは同じ文句を繰り返し繰り返し繰り返しながら次々とベランダの手摺りを破壊していく。三ヶ月に一回は岡本さんに起こる発作である。見慣れた主人と大沢さんは慌てることもなく、将棋に興じている。主人がいつものようにわたしに命令を発する。

「あのなんたら少女機械ってやつに変身して岡本の発作を抑えろ」

わたしは少女機械『ジュモ－・ハダリ』に変化する。これは岡本さんが趣味で制作した少女機械の初号機である。『ジュモ－・ハダリ』はジュモ－のビスクドールを参考にして製作されたもので、豊かで繊細で流れるような金髪、蛾の触角のような美しい長い眉に僅かに微笑みを浮かべたクローズマウス、エメラルドグリーンのパーパーウェイトアイを持ち、球体関節構造でできた華奢な体軀（身長六十cm）にはフォレストグリーンのシルクに綿リバーレースを使用したクラシックなワンピースを纏っている。

わたしは金属バットを振り回す岡本さんの前へ進み出る。岡本さんの双眸が見開き、金属バットがわたしに振り下ろされる。ガツンという金属と金属がぶち当たる鈍い音を発して、わたしの頭部が挫滅する。容赦なく次々と金属バットがわたしの体に打ち込まれていく。わたしは岡本さんに向かってか細い消え入りそうな少女の声色で言葉を発する。

「吉田康子です。リュウマチです」

上空に振り上げられた岡本さんの金属バットがハタと止まる。岡本さんの荒い息遣いだけがベランダに響きわたる。いつもの予定調和。発作終了。岡本さんがわたしを抱き上げる。わたしはこの『ジュモ－・ハダリ』のまま数時間はいなければいけないだろう。その間に、主人と大沢さんの対局は決着を向かえるだろう。そうなんだろう。

夕暮れが迫り、主人と大沢さん、岡本さんの三人は井上さんと合流して祇園祭の宵山へと四条通りに繰り出している。わたしは主人の命令で、猫の姿から『明日終はる』という文字に化けて、ネオ京都の上空を徘徊している。この場合の『明日終はる』とは、「明日には祇園祭が終わりますよ」という意味である。あちらの世界での実際の祇園祭の日程は次のようになっている。

七月一日：吉符入（きつぶいり）。

二日：くじ取り式。

七日：綾傘鉾稚児社参。

十日：お迎え提灯。神輿洗い。

十三日：長刀鉾稚児社参。久世駒形稚児社参。

十四日：宵々々山。

十五日：宵々山。

十六日：宵山。宵宮神賑奉納神事。

十七日：山鉾巡行。神幸祭。

二十四日：花傘巡行。還幸祭。

二十八日：神輿洗い。

三十一日：疫神社夏越祭。

つまり、七月一日の吉符入で祇園祭は始まり、三十一日の疫神社夏越祭で終わる。しかし、こちらの祇園祭は、十日のくじ取り式で始まり、十四日から十六日までに宵々々山、宵々山、宵山が開かれ、そして、十七日の山鉾巡行で祭を終えるという日程になっている。よって、『明日終はる』で問題ないのである。ということです。

わたしの視線は常に主人たちの姿を捕らえている。主人たちは四条通りを西へと向かっている。四条通りは幕末から明治の姿を再現しているため通りに沿って並ぶ建物は二階建ての京町屋である。その屋根の上には火の見櫓があり、多くの虚体が登っているのが見える。四条烏丸に立てられた長刀鉾の高さは周囲の建物から抜きん出ており鉾先に付けられた大長刀はネオ京都の天空に突き刺さらんばかりである。四条通りそのものもあまり広くなく、多くの見物虚体たちは町屋の軒下に群れ、あるいは町屋の二階から毛氈を垂らして祭り気分を盛り上げながら高みの見物をしている。群衆に揉まれて主人たちの歩む速度は非常に遅い。

コンコンチキチキコンチキチン

コンコンチキチキコンチキチン

お囃子の鉦の音が心地よく、ネオ京都の路地から路地へ流れていく。主人たちは漸く四条東洞院西入ルに建てられた長刀鉾の傍まで来ている。鉾立ての作業も最終局面を向かえ、長刀鉾にも明日の山鉾巡行に備えた様々な電子機器が慌ただしく移植されている。

「でっかいなあ」

大沢さんが長刀鉾を仰ぎ見ながら呟く。

「長刀の先端まで21・7メートル、棟まででも7・6メートルありますからね」

岡本さんが解説する。

「いやね、おれが言いたいのは、あちらの京都での祇園祭で見る長刀鉾は高層ビルに囲まれてなんだか貧相に見えてしまうんだが、ここネオ京都じゃあ、周りは二階建ての町屋ばかりだからその大きさがより迫力を増すというかそんな感じで……」

大沢さんが返答する。

「そりゃそうだな。ネオ京都はいいよ。ここからもちゃんと五山が見えるもんね」

井上さんが付け加える。ちなみにここネオ京都には五山の送り火という行事はない。今のところ。今後はわからない。

ワナワナワナと大きな歓声の波が東の四条河原町を中心にして四方へ伝わっていく。何か事件でも起こったのだろうか。早速、主人が「原因調査」と言って、わたしに指令を出す。

米国ロサンゼルスで核爆発。

七月十六日未明、[米国カリフォルニア州ロサンゼルス・ウェストウッド](#)で核によると思われる大爆発が起こった。米国政府は連絡を受け、すぐに米国軍を現地に派遣し救助活動を開始したが、被害状況は不明。少なくとも十万人以上の市民が犠牲になったとみられている。爆発直後より各メディアに犯行声明が送られてきておりそれによると犯人は、カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校で物理学を専攻するアジア系男子学生。犯行理由は、大学の同級生たちから受けた人種偏見によるものということ。なお、放射能汚染の危険性のため、ロサンゼルス周辺（爆心地より半径百キロ以内）は立ち入り禁止となっている。

わたしは速報を主人たちに送る。

「来たねえ、来た来た来たでえ！これは紛れもない[第伍使徒ラミエル](#)襲来や」

井上さんが喜色満面の顔で吼える。

「また出たよ、井上得意の使徒が」

主人がしらけた表情で呟く。

「また自作の核爆弾みたいですねえ。爆縮式の原子爆弾ですかねえ。それとも水素爆弾かなあ。十万人殺傷というのはなかなかのできですねえ」

岡本さんが考察する。

「最近、プルトニウムがあまりに簡単に手に入りすぎなんだよ。どこから流れてんだろう」

大沢さんが不満気に呟く。

「おそらく旧共産圏か、中東からでしょ」

岡本さんが即答する。

「日本でも数年前に[原爆にいちゃん](#)が現れたよな」

主人が思い出すように話す。

「城戸誠ですよ。爆縮式の原子爆弾を自作して、政府に対して自衛隊解散と核兵器所持を要求したり、煙草違法化と大麻合法化を要求した中学の先生ですよ。結局、自作の原爆抱えて東京の武道館傍のビルから飛び降りたものの本人は電線に引っかかって地上に着地して軽傷を負っただけで、原爆も爆発せず。なんか身も蓋もない結末で終わったかわいそうな人でしたね」

岡本さんが楽しそうに詳細を説明する。

「あいつは惨めだったよ。なんせ、肝心の原爆が爆発する能力がなかったんだっていうんだから、ありゃあ、お笑い種だね」

主人が吐き捨てるように言う。

「まあ、原子爆弾の自作というのはそれだけ難しいんですよ。あの[ジョン・フォン・ノイマン](#)でさえ漸く[人工粘性](#)の概念を取り入れることで上放物型[偏微分方程式](#)の差分近似に置き換えて計算することにより、曲がりなりにも衝撃波の数値計算ができるようになったんです。で、爆縮レンズが三十二面体であることがわかった。でもそれだけでプルトニウムを超臨界状態にもっていけるわけではないんです。単純な爆発の同期、圧力の均一化だけが問題なのではなく、入手したプルトニウムに最適化された圧力の問題もあり、個人で実用に耐えうる原子爆弾を製作するというのはかなりの知恵と労力と偶然が必要なんでしょう」

岡本さんの解説はまるで自分も一度は原爆を制作したことがあるというようなりアルなものだ

。

「第伍使徒が核となると第六はやっぱ生物兵器になるかなあ」

井上さんがぶつぶつと呟く。使徒というのは井上さんの終末感の核となる単語である。

人類はたったひとりの狂気によって滅びる。

これが常々、井上さんが主人たちに説いている話の主題である。そのたったひとりの登場までには段階があるというのが井上さんの持論で、第壹の使徒は十の一乗つまり十人程度の殺人を犯し、これは昔から多くの存在が報告されている。次に第貳の使徒は十の二乗つまり百人の殺戮を犯すことになり古くは米国オクラホマ市連邦政府ビル爆破事件のティモシー・マクベイがあげられるが近年は戦争機械の進歩により百人程度の殺戮は頻繁になっており多くの第貳使徒がいる。第参使徒は、千人程度の殺戮になるが、基地外軍人の暴走によるものがこれまで米国中国中東で三例報告されている。軍人と精神疾患ということで各人の詳細は公表されていない。第四使徒は一万人の殺戮になるが、さすがにこれは一例だけで三年前に東欧で生物学者ヨアヒム・クラカウスキーによる殺人ウィルス「[ヨシフ・ヴィサリオノヴィチ・ジュガシヴィリ](#)」によるものであった。今回は十万人規模であるから十の五乗つまり第伍使徒の登場となるわけである。そして、約百億の人類が滅びるのは、百億つまり十の十乗つまり第十の使徒によってということになるそうだ。

「アニメの世界と現実を混同しないでくれよな」

主人が困った顔つきで井上さんに言う。

「アニメとは関係ないって。ぼくは現実を話しているだけだよ」

井上さんが反論する。

「まあどちらにしてもあちらの世界はのっぴきならないものになりつつあるのは確かだ」

大沢さんがうまく話の着地点を見つける。

「ああ、あちらは大変だ。それに比べてこちらは楽しいなあ」

そういいながら主人が大きく伸びをする。ちなみにこちらの世界でも井上さん言うところの使徒は現れており、しかも既に第八使徒まで来ている。しかし、こちらの世界は虚体の数に限界がないためあちらの世界で第十使徒が最終使徒であるという終末がない。果てのない終末を目指して、こちらの世界では次々に使徒が現れてくるのだろう。おそらく。

コンコンチキチキコンチキチン  
コンコンチキチキコンチキチン

笛、鉦、太鼓の奏でる音色が夕闇のなかに浸透していく。主人たちは四条通りをさらに西に進み、室町通りを北に上がっていく。そこには菊水鉦や山伏山などの山鉦が建っておりそれぞれの場所で囃子方がその鉦独自の音色を奏でている。その音色に言葉を付与するように、手習い歌が詠まれている。これはこちらの世界の祇園祭の特色である。そうなんだ。

いろはにほへと ちりぬるを  
わかよたれそ つねならむ  
うゑのおくやま けふこえて  
あさきゆめみし ゑひもせすん

別の山鉦ではまた別の手習い歌が詠まれている。

あめつちほしそら やまかはみねたに  
くもきりむろこけ ひといぬうへすゑ  
ゆわさるおふせ えのえをなれあて

新町通りの放下鉦からも聞こえる。

あめふれは めせきをこゆる  
みつわけて やすくもろひと  
おりたちうゑし むらなへ  
そのいねよ まほにさかえぬ

さらに遠くの西洞院通りの蟻螂山からも流れてくる。

ひふみ よいむなや こともちろらね  
しきる ゆゑつわぬ そをたはくめか  
うおえ にさりへて のますあせゑほ

四条通りを南に下がった仏光寺通りの白楽天山からも呪詛のような手習い歌が聞こえてくる。

いしかねぬるに くちみほそ  
のせもたむるは をえれよら  
とますわこきや あんろゑめ  
おてなひけゆう さへつふり

様々な手習い歌を詠む声がネオ京都の上空で重なり干渉し合う。わたしはその安らかな音の波にのって心地よく舞う。『明日終はる』となってわたしは軽やかに舞う。そんな感じだ。

こちらの山鉾巡行はあちらの世界の山鉾巡行と同期して催される。あちらは快晴とのことだが、こちらは真っ暗な夜空となっている。陰陽という対比からか、こちらの山鉾巡行はいつも日中に開催されるも空は真っ暗闇に設定されている。そのため、山鉾には様々な電飾が施され極彩色の光に包まれている。

わたしは主人の命を受け『猫が餅つきをしている月』となってネオ京都の天空にぶら下がり、これから始まらんとする山鉾巡行を俯瞰している。

午前9時、「エーンヤーラー」と音頭取りの掛け声を合図に、長刀鉾が四条烏丸から車輪を軋ませて動き出す。鉾全面を電飾で彩られた長刀鉾からは眩いまでの光線が四方にまき散らされており、光り輝く大長刀は鉾頭から漆黒の空に向けて光の直線を放っている。前懸と胴懸は大きな液晶画面になっておりそこには抽象的な動画が映っている。囃子舞台の先端には生稚児ではなく、『愚鈍な稚児』がいる。こちらの世界の山鉾巡行の特徴のひとつであり、『愚鈍な稚児』は顔に機械人面を被っているためその中身が誰であるかは不明である。というより『愚鈍な稚児』そのものが虚体であるからその中身を論じること自体が意味をなさない。あちらの世界の生稚児は京都市内に住む由緒正しい資産家の十歳前後の男子という条件があるらしいが、こちらの『愚鈍な稚児』は才能ある電子音楽家というのが唯一の条件だ。そうらしい。

『愚鈍な稚児』が太刀で注連縄を両断、結界を解き放つ。囃子舞台にそろった囃子方たちが祇園囃子の音を奏でながら歌う。同時に、囃子舞台に整然と揃えられた数々の電子音楽合成装置を『愚鈍な稚児』が操作し始める。

コンコンチキチキコンチキチン  
コンコンチキチキコンチキチン

奏でられる音楽と同期して長刀鉾から光線の洪水が周囲に放射される。都大路に集まった見物虚体たちから歓声が湧き起こる。光と音の洪水を四方に撒き散らしながら長刀鉾がゆっくりと四条通りを東へと進んでいく。

コンコンチキチキコンチキチン  
コンコンチキチキコンチキチン

長刀鉾の屋根の上にひとつの虚体が現れる。いよいよネオ京都の山鉾巡行での最初の見せ物、自爆手古舞の始まりだ。自爆手古舞を舞うことができるのはヒト型虚体だけである。その虚体は、短く口上を語った後、自爆花火をのみ込み、鉾の屋根から空へと舞う。直後、自爆花火が爆発し、虚体は粉々となって美しい花火が漆黒の空を輝かすというのが自爆手古舞の伝統的形式だ。この自爆花火は既製品のものもあるが、多くの虚体は自分で制作し、その花火の華やかさを競っている。

「本日は皆様方のお尊顔を拝し奉りまして、恭悦至極に存じ上げます。一番籤の幸運を引きましたわたくし菖蒲池薫と申します。今晴れやかな心地で舞いたいと存じます。ごらあ、秀明！この馬鹿息子！お前のせいでお父さんどれだけ苦労してるかわかってんのか！死ね、糞息子が。皆

様方、下品な口上で失礼しました。それでは逝ってきます。逝ってきますああす」

一番籤を引いた虚体が口上というより言いたいことを勝手に叫んで自爆花火を口にのみ込む。にやりと不気味な笑みを浮かべて長刀鉾の屋根を思いっきり蹴り、宙に舞う。頂点で四肢を大きく伸ばし爆発する。深紅の牡丹星だ。一番花火としては無難ではないかと思う。確かにそうだ。虚体の肉片が散り散りになって地面に飛び散る。これもなかなかの演出だ。血に染まった肉片を浴びた虚体たちから喜びの歓声が湧く。

コンコンコンチキコンチキチン コンコンチキチキコンチキチン

コンコンチキチキコンチクショウ コンコンチキチキコンチクショウ

囃子方たちの歌う声に怒気のようなものが帯びていく。一番籤の虚体が舞った後は順番などは存在しない。皆が思い思いに好きな場所から好きな口上を述べて自爆していく。直ぐに三体の虚体が長刀鉾の屋根に上がり、各人勝手に口上を述べる。

「わたしは鴉。いや鴉外。わたしは鴉。いや鴉外。軍医なんてやってられるか。いいか、われが今こそ近代文学に鉄槌をください。近代文学を殲滅せよ！さらばじゃ、近代文学。では、逝ってくる。逝ってくるぞおおおお」

「日本の四季を愛する死期と申します。僕はもうだめになってしまった、毎日涙もなく号泣しているような次第です。そんな次第で、ぼくは逝ってきます。さようなら」

「労咳でサナトリウムに暮らす可辞意です。馴染みの京都寺町の果物屋がなくなってしまうそうです。悲しいかな。それでもわたしの檸檬の爆弾は爆発します。わたしは檸檬の爆弾を抱いて舞います。逝ってきます。皆さん、逝ってきますああああああす」

三体が同時に宙に舞って、爆発。銀蜂と葉落と虎の尾。それぞれはちょっと地味な感じだが、さすがに三つ一緒だと派手派手しい。と思う。

コンコンチキチキコンチクショウ コンコンチキチキコンチクショウ

コンチクコンチクコンチクショウ コンチクコンチクコンチクショウ

囃子の音色も混沌とした狂気じみたものへと変容していく。長刀鉾の屋根から次々に虚体が夜空に舞っていく。後方の山鉾からもどんとどんと虚体たちが舞い落ち自爆する。周りの町屋の火の見櫓からも虚体が四条通りに向かって飛び降り爆発する。あちこちで花火が煌めき、虚体が破裂する。四条通りは砕け散った虚体の肉片破片血餅鮮血で地獄絵図のようだ。「おおおい、あしたをはる」とわたしを呼ぶ声が聞こえる。長刀鉾の後方に位置した綾傘鉾の屋根に岡本さんの姿を認める。いつもの学生帽に詰襟学生服姿の中学生。しかし、顔は白粉で真っ白に塗りたくられ、口には真っ赤な紅が塗られている。正気なのか、それともあの発作のように狂気の真っ直中にいるのか。わたしにはわからない。

「大工町寺町米町仏町老母買ふ町あらずやつばめよ。死んでください、お母さん！逝ってきます、逝ってきます、逝って、きまああああす」

岡本さんが叫び、自爆花火を苦しげにのみ込んで屋根を蹴る。二回転半捻りという大技で宙を舞う。ゆるりと宙を舞う。同時に爆発する。銀冠だ。銀色の光の線がしだれ柳のように垂れ下がるようにゆっくりと落ちてくる。その中に千々に裂けた詰襟学生服が花卉のように優雅に落花していく。学生帽だけが原型をとどめたままでくるくると回転しながら空中を飛行し彼方へと飛び去っていく。

「こちら田中です。今から実況始めます」

あちらの世界にいる主人からの実況中継が繋がった。今現在、こちらに主人の虚体の姿は認められない。

「今どこにいるんだよ」

大沢さんの声が聞こえる。確認すると大沢さんは四条河原町通西入るの織物問屋の火の見櫓にいます。隣には井上さんの姿も確認できる。

「もう『天井桟敷』の中に入って、今寛いでいるところ。こっちもそろそろ長刀鉾が近づいてきてる」

主人が応答する。

「おまえのかわいい子ちゃんたちはまだ来てないのかい」

井上さんが訊く。

「今のところ、まだ」

焦った風でもなく、落ち着いた感じで主人が答える。

「こっちは岡本がもう逝っちゃったよ」

大沢さんが主人に報告する。主人からは返答はない。おそらく関心がなく、聞いてないのだろう。

山鉾巡行はますます熱を帯び、狂宴は盛り上がっていく。ネオ京都を取り巻く火壁に登ってそこから山鉾に向かって飛行してくる虚体たちがいる。飛翼背広を着て、マッハの速度で一直線に四条河原町交差点へと向かってくる。そして、そのまま四条河原町交差点の地面へと衝突する。その瞬間、号砲が響きわたり衝突地点から八重芯の牡丹花火が円蓋状に爆発する。間を置かずに次々と飛翼背広虚体たちが四条河原町交差点へと飛行衝突していく。号音が轟き、極彩色の牡丹花火が次々とその花卉を拵げていく。

コンコンチキチキコンチクショウ コンコンチキチキコンチクショウ

コンチクコンチクコンチクショウ コンチクコンチクコンチクショウ

コンチキコンチキコンキチガイ コンチキコンチキコンキチガイ

「おおおい、あしたをはる」今度は村田さんの声が聞こえる。確認すると四条通りを挟んで大沢さんと井上さんがいる場所の向かいの火の見櫓に村田さんを発見する。しかし、その虚体はいつものねずみ男ではなく、普通の人々の姿である。が、その顔には黄色のダイナマイトのようなものがぐるりと巻き付かれ表情を窺い知ることはできない。

「気狂いピエロだよ。機具類じゃなくて基地害だからな」

村田さんのやけに明るい昂揚した声が響く。それはなおも続く。

「田中に伝えてくれ。第四世代のやつ、手に入れたって。『跳躍人』ってんだ。とにかくすげえええって。すげえええええんだよ」

どうやら村田さんは第四世代脈楽を手に入れ、現在負荷中みたいだ。だからあんなに躁状態にあるわけだ。なんだ。

「おまえら、みんなよく聞け！おれはこっちとあっちを同期させてやる。いいか、おれはあっちで自爆する。自爆祭の実体化だ、ぐははは、みてろよ！」

村田さんが叫ぶ。山鉦巡行を楽しんでいる虚体たちから次々と反応が返ってくる。「いかがわしい天使が舞い降りてきましたよ」「基地害ひとり発見」「薬中毒の天使かよ、終了」「おおいおい誰か警察呼べ」「『跳躍人』って、おまえ」「神降臨か？」「無茶しやがって」「神展開希望」「この祭りの際になんだよ」「これって、新種の詐欺」「祭りだ祭りだ。基地害参加迷惑千万」「おまえら、神に向かってその態度は何だ」「あちらの山鉦巡行見てるやつ、実況よろしく」「誰か実況しろよな」「虚言だよ、統合失調者の戯言だ」「電波を感知しました」「天狗じゃ、天狗の仕業じゃ！」「ベルモンドよりアンナ・カーリーナが自爆するのが見たい」「警察に通報しました」コンコンチキチキコンキチガイ コンコンチキチキコンキチガイ コンチキコンチキコンキチガイ コンチキコンチキコンキチガイ キチガイキチガイコンキチガイ 囃子方たちの歌い声がますます激しくなり狂気じみて来る。いしかねぬるにくちみほそ のせもたむるはをえれよら あめつちほしそらやまかはみねたに くもきりむろこけひといぬうへすゑ 統御を失った手習い歌が出鱈目に歌われていく。「村田を発見！」主人の甲高い声が響きわたる。「おおいおい、ほんとかよ」大沢さんの反応が聞こえる。「向かいの高島屋百貨店の屋上にいる。こっちに手を振ってるよ」主人があちらの様子を実況する。「って、田中、おまえ、村田の実体を知ってるのかよ」井上さんが訝しむ。「ああ、脈楽関係で実際に会ったことがあるんだ」主人が答える。「で、どんな格好してるんだよ。そちらの村田は」大沢さんが訊く。「格好って、普通だよ。Tシャツにジーンズ。あっ、鞆から黄色い棒の束を取り出して顔に巻き付け始めた」こちらの様子がわからない主人は何も疑問を挟むことなく解説する。「おおいおい、同期してるよ、同期してるよ」井上さんが困惑しているのか喜んでいるのかわからない感じで声をあげる。「うおおい、神降臨」「おまえら、神が降臨なされるぞ」「マジだよ、マジ。基地害がマジだよ」「通報しろ、早く通報しろ」「丸竹夷二押御池姉三六角蛸錦だ。まいったか」「もちつけ、おまえら」「ぼこぼこにしてやんよ」「うんこついてないのにうんこくさい」「ほほうそれでそれで」「これは孔明の罫だ」「こやつめ、ハハハ！」周囲から怒濤のごとく様々な反応が返ってくる。悪鬼羅刹暗澹冥濛異端邪説姪虐暴戾怨徹骨髓鬼哭啾啾猜忌邪曲屍山血河醉生夢死魑魅魍魎佞惡醜穢咆哮搏擊無慙無愧妖姿媚態六道輪廻。岡本さんの呪文の音が耳元で聞こえる。逝ってしまった岡本さんはわたしの月の上に乗っかかって祭りを高みの見物と洒落ている。一度逝ってしまった虚体は二度と逝くことはできない。しかし、こうやって復活して見物するのは許されている。長刀鉦が四条河原町交差点へと近づいてくる。ここでは巡行最大の見せ物、辻回しが行われる。相変わらず空には多くの花火が舞い、山鉦からは『愚鈍な稚児』と囃子方が奏でる電子囃子の噪音が放たれている。あめふれはあせきをこゆるみつわけてやすくもろひとうあのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせすんコンコンチキチキコンキチガイコンコンチキチキコンキチガイコンチキコンチキコンキチガイコンチキコンチキコンキチガイキチガイキチガイキチガイキチガイより強くより速くより良くより気高くより鋭くより軽くより高くより久しくより熱くよ



一瞬の静寂が祭りを包む。自爆花火はのんでいないのか花火は咲かない。村田さんの白色の脳髓が周囲に飛散している。長刀鉾は微動だにしない。「そちらはどうなった」「神は舞い降りたか」「実況どうした」「神は降臨なされたのか」「天使は堕ちたか」「おおおうい、エロい人、実況お願いします」「神は死んだ」「基地害どうなった」「警察に捕まったか」「おおおい、答えろ、鬼太郎」「みんな死んでしまえばいいんだ」「もうおこったぞう」「**ご冥福をお祈りします**」「**そんなことより野球しようぜ**」「ごらあ、はよ実況せいや」野次が主人に浴びせかけられる。主人から返答はない。コンコンチキチキコンチキチンコンコンチキチキコンチキショウコンコンチキチキコンキチガイコンコンチキチキコンキチガイコンチキコンチキコンキチガイコンチキコンチキコンキチガイキチガイキチガイキチガイキチガイ。再び、『愚鈍な稚児』と囃子方たちの演奏が始まる。まるで何もなかったように辻回しが行われていく。曳子が音頭とりの扇子にあわせ、目一杯鉾を引っ張る。じりじりと軋む音を発しながら長刀鉾が四条河原町交差点を回転していく。「こちら、あちらの祇園祭実況しますよ」正体不明の声が聞こえる。「きたきたきたあああああ」「待ってました」「これぞ神展開」「神が再び舞い降りた」「誰でもいいから早くしろってんだ」「早漏野郎は黙ってろ」「おまえら、落ち着け」「で、あんた誰」「で、どうなった」「教えて、エロい人」「**利いたふうな口をきくなあ**」「**ありのまま今起こったことを話せや**」いってきまーす。いってらっしゃい。ただいま。おかえり。岡本一樹です。元気です。吉田康子です。リュウマチです。こんな重大な時に限って岡本さんが狂い出す。いや、わたしの上で吠えているだけだ。なんとかこのままでいてほしい。「ええっと、わたし、今、四条河原町の東北角にいるんですけど、さっき顔になんか板みたいなのを巻き付けた人がビルの屋上から飛び降りてきました。で、そのまま長刀鉾の傍に落下してしまいました。足と腕が変に捻れて横たわってます。頭からは真っ赤な血が溢れ出しています。今、観客たちは大騒ぎです。辻回しも中断されてます。警官が落下した人の周りを取り囲んで、今、布を被せています。救急車のサイレンの音が聞こえてきました」あちらの正体不明の人が息を切らしながら実況する。「爆発は?」「おい自爆したんじゃないのか?」疑問の声があがる。「はあああ?爆発って、何言ってんですか」あちらから素っ頓狂な声が返ってくる。「ざまあ(笑)」「神は堕ちた(笑)」「ざまあざまあざまあねえ」「惨惨惨惨惨惨」「何やってんだか」「嗚呼」「これを無駄死にってんだ」「これぞ、**メシウマ**」「おいおいそもそもダイナマイトだったんかいね」「水泳の飛び込みの練習したんだろ」「せめて大長刀に突き刺されよ」「お悔やみ申し上げます(笑)」「最悪展開来たあ」「おまえら、山鉾巡行途中中止だぞ。sonだだけでも快拳だってんの」「**それはひょっとしてギャグでいつているのか**」「**きみは実にばかだな**」「他人事ではない」「他人事だよ。たにんごとっていうなよ。ヒトごとだからな」「もうどうにでもなあれ」様々な反応がこちらの山鉾巡行に渦巻く。いってきまーす。いってらっしゃい。ただいま。おかえり。岡本一樹です。元気です。吉田康子です。リュウマチです。吉田康子です。リュウマチです。吉田康子です。リュウマチです。岡本さんがその狂気を加速させていく。わたしの上から飛び降り、ネオ京都の町中へと降下していく。その姿が群衆の中に埋もれて消える。何かしでかすはずだけどわからない。狂った岡本さんを制御できるのはわたしだけだが、今そんな暇はない。岡本さんには狂っていてもらおう。それでいいはずだ。そんな気がする。確かにそうだ。ということらしい。話聞いていないでしょ。それはない。てかありえない。狂え狂え狂え狂え、この虚体どもよ。「見物客が皆、警官に誘導されて交差点から離れていきます。わたしもその人並みに押されてもう現場が見えなくなりました。どうやら山鉾巡行は中止のようですよ」正体不明が連絡する。「なんで、面白くないの」「意気消沈ですね」「そこで神がすつくと立ち上がり一言」「ないって」「ないよ」「

あり得ん」「死ぬ」「即死だよ」「一生呪われよ」「アスファルトさんが大活躍だ」「ここに超えられない壁がある」「ちんこ勃ってきた」「自作自演も疲れるぜ」「俺様が釣られるとおもってんのか」「さあ、逝こうか」こちらの山鉾巡行はさらに勢いを増していく。見物客と自爆古手舞の舞手の熱気が混じり合いそこに『愚鈍な稚児』と囃子方の混沌とした電子音楽が交錯しネオ京都は狂気を発汗していく。コンコンチキチキコンチキチンコンコンチキチキコンチキショウコンコンチキチキコンキチガイコンコンチキチキコンキチガイコンチキコンチキコンキチガイコンチキコンチキコンキチガイキチガイキチガイキチガイキチガイ奴婢訓練夢術阿呆船邪宗門電子城阿片戦争夜叉綺想盲人書簡花札伝綺犬狼都市模造石榴少女都市鉛の心臓椅子と伝説ねじの回転地球空洞説疫病流行記死のような死死体のある風景雰囲気のある死体。怪人二十面相も参戦する。コンコンチキチキコンチキチンコンコンチキチキコンチキショウコンコンチキチキコンキチガイコンコンチキチキコンキチガイコンンチキコンチキチキチキマシンコンチキコンチキチキチキマシンコンチキコンチキコンキチガイコンチキコンチキコンキチガイキチガイキチキチマシンキチキチマシン。「田中はどうしたんだ？『あしたをはる』よ」大沢さんがわたしに訊いてくる。わたしに訊かれてもあちらの世界のことはわたしにはわからない。「あの、それより岡本さんが発作に襲われて町中へ行ってしまいました」わたしは申し訳なさそうに報告する。「岡本？いいからほっとけ」井上さんがあっさりと切り捨てる。何体の虚体が岡本さんの金属バットの犠牲になるのだろう。確かにどうでもいいといえればいい話だが。「田中からの実況もないし、退屈だからそろそろおれたちも逝くか」大沢さんが井上さんに話しかける。「ああっ、そろそろ逝っちゃおうか」井上さんが同意する。先頭の長刀鉾は河原町三条を通り過ぎ、平安神宮へと向かっている。あちらの山鉾巡行は河原町御池から御池通りを西へと新町まで巡行し終わるが、こちらの巡行は河原町三条から神宮道へと向かい平安神宮を通って岡崎の六勝寺を經由し丸太町通りを西へ大内裏まで巡行し朱雀大路を南下し羅城門で終わるという丸一日を要する長距離巡行である。大沢さんたちのいる織物問屋の前にはちょうど白楽天山が通り過ぎようとしている。まずは大沢さんが口上を述べる。「大沢幹生と申します。人生の師匠は升田幸三です。うんこは嫌いです。それはともかく逝ってきます。逝ってきますああす」面倒くさそうに声をあげ、既製品の自爆花火をのみ込み火の見櫓から跳躍する。未確認飛行物体の型をした立体的な型物花火が爆発する。既製品にしてはなかなか凝っていると感心する。次に井上さんが続く。「われは第十使徒サハクィエル。百億の人類を殲滅せん。逃げちゃだめだ、逃げちゃだめだ。何度でも言います。人類はたったひとりの狂気によって滅びるのです。それでは逝ってきます。逝ってきますああああす」自作の自爆花火をのみ込み宙に舞う。爆音とともに絨毛突起を付けた単細胞生物のような橙色花火が開く。特異な形だが、これが井上さんのこだわりなのだと思う。絶対にそうだ。長刀鉾が平安神宮の大鳥居に到着する。大鳥居の上には二日前の火球襲来により壊滅してしまったがそこから復活した新撰組の隊士たちがいつものダンダラ模様を白く染め抜いた浅葱色の羽織を纏い、右手には赤地に白字で「誠」を染め抜いた隊旗を掲げて立っている。わたしの好きな佐々木愛次郎の姿も見える。長刀鉾がちょうど大鳥居の下を通過する際に、新撰組恒例の串刺し儀式が行われる。隊士がひとりひとり順番に長刀鉾の大長刀に向かって落下し串刺しになるのだ。先頭を切って、局長の土方歳三がお腹を露出して大長刀に向かって飛び降りる。音もなく出血もなく花火もなく静かに土方歳三が大長刀に串刺しになる。次から次へと新撰組の隊士たちが大鳥居から舞い落ち大長刀へと串刺しになっていく。佐々木愛次郎も飛び降りる。どうでもいいけど、少しは胸が締め付けられるような気がする。そんな感じだ。くやしいのうくやしいのうかなしいのうかなしいのうはがゆいのうはがゆいのうむねんやのうむねんやのうコンコンチキチキコン

チキチンコンコンチキチキコンチキショウコンコンチキチキコンキチガイコンコンチキチキコン  
キチガイコンチキコンチキコンキチガイコンチキコンチキコンキチガイキチガイキチガイキチガ  
イキチガイ諸行無常是正滅法生滅滅已寂滅為樂。「おおうい、『あしたをはる』、こっちだこっ  
ちだ」主人がわたしを呼ぶ声が聞こえる。こちらに帰ってきたようだ。やけに浮かれた声色だ。  
見ると主人は法勝寺の八角九重塔の上にいる。へらへらと笑いながらわたしの方へ大きく両手  
を振っている。おそらく主人は脈樂を負荷しているに違いない。きっとそうだ。「おい、田中、  
いままで何してたんだよ」いつの間にか大沢さんと井上さんがわたしの月の上に乗っかかっ  
ている。わたしは座りがいいように満月から三日月へと形を変える。「実況中継はどうなったん  
だよ」井上さんが主人に文句を投げかける。「すまん、すまん」主人がへらへらのままで素直に  
謝る。「で、三位一体計画はどうなったんだよ」大沢さんが急かすように訊く。「ええっと、心  
臓の綾香は村田の騒ぎで待ち合わせ場所まで近づくことができなくて、またの機会ってことで、  
肝臓の有香はまったく連絡なしでおまえ殺すぞって。腎臓の彩乃は来てくれた」「来たあああ  
ああ」井上さんが大声をあげる。「来たってひとりだけだよ」大沢さんが冷静に反応し、主人に  
問いかける。「で、その腎臓の彩乃との間に共鳴現象は生じたのかよ」「ああう、よくわから  
ない。状況が状況だろ。村田のこともあって」主人が相変わらずへらへらとしたままでそれでも  
少しは申し訳なさそうに答える。「まあそうだろうな」大沢さんがさも当然という風に返す。  
そりゃそうだ。ワンツースリーフォいちにのさんはいワンツースリーフォいちにのさんはい6九  
玉3一角7九角4四歩3六歩4三金右6八角4二角7九玉3一玉8八玉7四歩逝ってきまーす逝  
ってらっしゃいただいまおかえり逝ってきまーす逝ってらっしゃいただいまおかえりコンコンチ  
キチキコンチキチンコンコンチキチキコンチキショウコンコンチキチキコンキチガイコンコンチ  
キチキコンキチガイコンチキコンチキコンキチガイコンチキコンチキコンキチガイキチガイキチ  
ガイキチガイキチガイ。長刀鋒が八角九重塔の前にさしかかる。主人が口上を述べる。「田中宏  
だあ。今、とんでるみたいだあ。かっぱえびせんが食べたい。結局ぼくらは生きてるみたいだあ  
。じゃあ逝ってきまふ。逝ってきまふ。逝ってきまあああああああああふ、だあああ」既製品  
の自爆花火をのみ込み主人が八角九重塔から天空へと舞う。顔が締まりなく笑っている。なんて  
気持ちよさそうなんだ。アフロヘアーの頭から地面へと落ちていく。爆発しない。そのまま  
ぐしゃっという身も蓋もない音を発して地面にぶつかる。虚体だから骨折するわけでもなく内臓  
破裂するわけでもない。「不発じゃん」不満げに呟きながら主人が起き上がる。「ざまあああ  
」「ぷっ、田中」大沢さんと井上さんが苦笑する。不発の場合は爆発するまで再挑戦できるのが  
こちらの祇園祭の習わしだ。主人はそそくさとよれよれの足取りで再び八角九重塔の塔頂に登り  
始める。「おおい、慌てんなよ」大沢さんが声をかける。主人は聞いてない風だ。おそらく聞い  
ていない。大沢さんと井上さんはわたしの上で将棋を始める。6五歩4二角5七銀6四歩同歩同  
角6六銀右3四銀5七角4五銀6五歩4二角ワンツースリーフォいちにのさんはいワンツースリ  
ーフォいちにのさんはい3八飛7三桂3五歩6四歩4六歩3六銀コンコンチキチキコンチキチン  
コンコンチキチキコンチキショウコンコンチキチキコンキチガイコンコンチキチキコンキチガ  
イ電人M糸女郎夜光人間巨人引力鉛人形吸血姫少女仮面せむし男身毒丸鉄人Q腰巻お仙偶然童  
子いしかねぬるにくちみほそのせもたむるはをえれよらとますわこきやあんろゑめおてなひけ  
うさへつふり孤立無援暗澹冥濛異端邪説姪虐暴戾厭離穢土欣求浄土造反有理天壤無窮怒髪衝天磨  
穿鉄硯無慙無愧銘肌鏤骨幽寂閑雅六道輪廻岡本一樹です元気です吉田康子ですリュウマチです岡  
本一樹です元気です吉田康子ですリュウマチです。幽かに岡本さんの声が聞こえる。姿は認識で

きない。相変わらず狂っているのだろうか。主人が八角九重塔の上に再び立つ。足下が覚束ない。大沢さんと井上さんはそんな主人にまったく関心を示さず将棋に熱中している。祭りは続く。仕事は終わらない。祭りは続く。コンコンチキチキコンチキチンコンコンチキチキコンチキシヨウコンコンチキチキコンキチガイコンコンチキチキコンキチガイコンチキコンチキコンキチガイコンチキコンチキコンキチガイキチガイキチガイコンチキコンチキチキチキマシンコンチキコンチキコンチキチン

(了)